正岡子規集

改造社版

杉浦非水裝幀

昭和三年四月二十五日印刷
昭和三年五月一日發行

現代日本文學全集　第十一篇

著者　正岡子規

發行者　山本美
東京市芝區愛宕下町四丁目六番地

印刷者　杉山愛二
東京市牛込區市ヶ谷加賀町一ノ一二

發兌　東京市芝區愛宕下町四丁目六番地　改造社
振替東京八四〇二番
電話芝(43)一一一一番 一一一一番 二二二二番 四三二一番

株式會社秀英舍印刷

「正岡子規集」目次

巻頭寫眞（照影筆跡）

小傳

隨筆篇

松蘿玉液……三
墨汁一滴……三九
病牀六尺……九九
仰臥漫錄……一六四
仰臥漫錄二……一八九

小說篇

曼珠沙華……二〇七
花枕……二一九
月の都……二三五

小品篇

小園の記……二五〇
車上所見……二五二
雲の日記……二五五
夢……二五五
蝶……二五五
酒……二五七
夏の夜の音……二五七
旅……二五八
ゐざり車……二五九
飯待つ間……二六一
柚味噌會……二六二
闇汁圖解……二六三
根岸草廬記事……二六五
熊手と提灯……二六七
病……二六九
新年雜記……二七二
ラムプの影……二七四
車上の春光……二七六
明治卅三年十月十五日記事……二七八
初夢……二八五
死後……二八八
くだもの……二九五
煩悶……二九八
九月十四日朝……二九九

歌論歌話篇

歌よみに與ふる書……三〇一
歌よみに與ふる書……三〇一
再び歌よみに與ふる書……三〇二
三たび歌よみに與ふる書……三〇三
四たび歌よみに與ふる書……三〇四
五たび歌よみに與ふる書……三〇五
六たび歌よみに與ふる書……三〇六
七たび歌よみに與ふる書……三〇八
八たび歌よみに與ふる書……三〇九
九たび歌よみに與ふる書……三一〇
十たび歌よみに與ふる書……三一二
あきまろに答ふ……三一四
人々に答ふ……三一六
歌の題……三二一
五七五七七……三三三
曙覽の歌……三三六

俳論俳話篇

俳諧大要……三四六
俳句問答……三七九
獺祭書屋俳話……三九〇
獺祭書屋俳話正誤……四一四
隨問隨答……四二〇
芭蕉雜談……四五四
古池の句の辯……四七四
俳人蕪村……四八四

評論篇

水滸傳と八犬傳……五〇六

和歌篇

短歌・長歌・旋頭歌……五一五

俳句篇

俳句……五五五

年譜……五七一

編輯後記……寒川鼠骨……五七四

子規居士小傳

居士は伊豫松山藩久松侯の家中正岡隼太の長男として松山市に呱々の聲を擧げた。父君は早世せられたが、母君は藩儒大原觀山先生の長女で、八十二歳まで長生せられた人であった。居士は恐らく母君の血をうけ、本來の體格は丈夫であったやうである。文學的藝術的血液としては、母君の系統と祖父君の系統との合流によるもので、祖父君は藩の御茶坊主とし、將た連歌師として一家を成して居られたやうに居士自身が記して居られる。

五歳にして素讀を學び十一歳繪を學び、其時代既に異色のある兒童として認められて居たことは、其時代の居士の肉蹟が他の手により保存せられてゐるので知られるのである。

十六歳初めて東京へ遊學、初め漢學を次に哲學を志して遂に大學豫備門に入學、東京帝國大學では國文科に入り、二ケ年の修業で不幸二豎の爲めに退學した。居士は、大學で修める學科が、居士の志す所と沒交渉のものが多いからといふのを退學の一理由として居るけれども、勿論病氣といふことも其退學原因の重大なものであったのだ。

退學が病氣に因る如く、居士の事業亦病氣によるものが多い。其俳句研究を初めたのは喀血後明治二十一、二年頃からである。「俳句を研究せねば、足利以來の日本文學と其思想は到底闡明することが出來ない」とは其頃居士が他に語る口癖であったが、斯く考へることも亦病身といふことが手傳つて力あるものである。

さうして二十四歳より俳句の復興革新に志し、僅々五年二十九歳の頃には略ぼ其大業を成就するに近くなつてゐたのである。次に三十歳頃から和歌の革新を思ひ立ち、「紀の貫之は下手な歌よみにて古今集はくだらぬ歌集に有之候」といふ當時としては歌壇の反逆兒としか思へない畏るべく驚くべき宣戰の言葉を放つて健鬪すること三年有餘、其の三十四歳の頃には既に退くも歌壇一千年の永き惰眠を覺醒し、寫生趣味による眞實味と自然味とを和歌に注入して以て殿上文學たる和歌を地下の書生學徒の手に移したのであった。次で文章の革新をも思ひ立ち、寫生趣味を加へた言文一致の文を發表し、眞實を自然の儘に敍寫するのでなければ、到底永遠の生命ある文章を得べからざることを稱道し、所謂寫生文なる一派の文を興すに至つたのが、明治三十二年頃から其晩年たる三十五年頃までの活動により成就せられたのであつた。漱石の猫が生れたのも亦實に子規居士の造つた搖籃に於てしたのである。

斯樣な明治文學史上に最大の意義ある事業を成す傍ら、明治二十四年頃から、俳句の分類だの、俳家全集などの編著にも精力を注がれた。

二十歳喀血し、三十歳脊髓を冒されて、腰は全く立たず、カリエスは開口して漏膿し、痛苦を伴つた。三十歳の頃以後は年百年中三十七度二三分乃至三十九度位の體溫が干滿した。生れて虛弱、十二三歳より五六年僅かに小康を得、さうして盛年常に病魔に冒されて以て一生を終つた。居士は畢竟病を以て終始したものである。さうして享年僅かに三十六歳、明治三十五年九月十九日示寂せられたのである。

おとゝひの絲瓜の水も取らざりき
絲瓜咲いて痰のつまりし佛かな
痰一斗絲瓜の水も間にあはず

死前一日、即ち九月十八日此世に留められた名殘の句が、それである。

昭和三年晩春　　寒川鼠骨記

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

松蘿玉液

○病稍〻間あり、杖にすがりて手のひら程の小庭を徘徊す。日うら〻かに照して鳥空を飛ぶ。心よきことはん方無し。二三本の小松は綠のびて凌雲の勢をあらはし、一尺許りの薔薇は莟ふくれて一點の朱唇を見る。秋草はわづかに芽を出していまだ萩とも桔梗とも知らぬに一もとの紫羅傘は已に一輪の白花を開く。雨後土未だ乾かぬ處にさゝやかなる蟲のうごめくはこれも命あればなるべし。

萩桔梗撫子なんど萌えにけり
一八の一輪白し春の暮

○上野の花　いかにあらん。春の日和を獨りふすまの中に寢てあれば只ごお〳〵といふ音のみぞ聞ゆる。

寢て聞けば上野の花のさわぎかな

ある日稍〻心よきまゝ車に扶け載せられて上野を巡りけるに、綺羅の群衆花の陰に滿ちて鬼事に餘念なくあるは鬼事を見てうつゝなし。いかばかりかうれしからん、風船さへ浮き〳〵として飛びたがる今日此頃。

新阪や向ふに見ゆる花の雲
古宮の櫻咲くなり杉の奥
黑門も摺鉢山も櫻かな

○向島の花　いかにかあらん。紅雲十里黃塵萬丈の光景眼の前にちら〳〵と見えて土手沈むこと三寸三分。

此花に酒千斛とつもりけり
花ちら〳〵島田の男酒を飲む
交番やこゝにも一人花の醉

○演劇脚本　ある人いふ、君は桐一葉を非難したり、さて櫻癡の作をほむるの意か。答へていふ、桐一葉を非難したるは已に重きを此著に置きたるなり、敢て櫻癡が作に劣れりとにはあらず、櫻癡學海の作はじめより論評せず。

○批評欄　新聞雜誌の批評欄にある書を非難したりとて著者の腹立てたる例少からず。汗は能くもの知らぬ素人の考よりしか思ふなり。批評せらるゝ書の價値は第一に批評の長短に因りて定まること多し。批評の長き者は其評語の如何に拘らず已に其書に重きを置きたるものにして、其裏詞多きと貶言多きとは其次に價値を定むべき標準なり。即ち批評の長短は第一の褒貶にして言語の褒貶は第二の褒貶なるべし。

（四月二十一日）

○詩人の棚卸し　といふ一篇出でゝ詩人仲間を動搖せしめたる由聞ゆ。此一篇で動搖するやうな莨翡的詩人は物の役にもたつまじくぞ覺ゆる。はたおのれにうしろ暗きこともあるらん。由來詩人などいふものは桃源の裡に立て籠りて外人には指もさゝせじと誇り居しかば、一發の空砲にすら肝を潰してはやいくさの始まりたらんが如く騷ぐこそ笑止の至りなれ。今の政治界小說壇を見よ、其罵詈讒謗のはげしきことは平壤旅順の鐵砲玉にもまさりてんを、若し詩人を此間に處らしめば砲聲を聞いたばかりにて即死の二三十人も出來るならん。さても詩人殿の内に誇りたまふに似ず外に對する氣の弱さよ。

○詩人の惡弊　多しといふ者あり。されど局外者は其事實を知らねば證據を擧ぐるに由なし。只「詩人は俗なり」「詩人程俗な者はあらず」などいふことは常に耳に入り來る語なり。蓋し吾人は常に詩人を待つに雅人を以てす。故に斯

く反剉せる惡口を見るなるべし。兎に角に惡詩に誤評を呈するも弊の一なり。長者を取り込むも弊の一なり。菓子の一折を誤評の一行と交換するも弊の一なり。又書籍の取り切りも弊の一なりとぞ。書籍の取切りといふことの仔細を尋ぬるに借りた本は再び返さず、又本を貸す時は抵當として他の本を借り置くことあり。甚だしきは貸さぬといふ祕書を其人の留守に行きて細君より借り來り、終に返さぬなどといふこともありとぞ。書籍を愛するは其心猶恕すべきものあれど書籍以外にも多少類似の事を聞きたる事無きにもあらず。此風評にして無根ならば幸なれども若しあつたらばそれこそ大變なれ。

○神宮教等　非難の聲は「闇夜の灯」といふ雜誌より起る。これ亦詩人と同じく忽ち動搖を生じたりと聞ゆ。世人は神宮教といふ名を聞きて多少の尊敬を爲すより神宮教はから威張りに威張りて中には「我神宮教は宮內省のやうなものなり」など無禮不敬の語を發する者あるに至れりとぞ。されば此際神宮司廳と神宮教との區別を明かにし、神宮教は單に一團の宗教的講社なることを世に知らしめんこと必要なりとは同雜誌の大呼する所なり。多少の神道的團體の中神宮教は比較的に高尚なる者なるからに、なかなか上中等社會を欺くこと多ければ特に同教を非難するなり。其他の蓮門天理諸教の如きは惡弊言ふに堪へざる者あれどこれ等は下等社會を相手にする者なれば雜誌の攻擊などは其效力無きを奈何せんと同記者は言ひしとか。諸教皆緋源の裡に住む者なれば萬朝の御厄介にならねばならぬこともあるべし。

（四月二十二日）

○臥遊紀行　春雨のつれ〴〵枕を敲いて歌へども、まぎらすべくもあらず。靜かに思へば常總の山河眼に浮び心に現はれて七年前の膝栗毛に水戸の旅籠屋を追ひ出されたる事など獨り笑壺に入ること多きを、折ふし此頃の時候なりければ麗かなる野道の景色、菜黃麥綠の中に川の面は見えで白帆蓆帆のつらなりたるまでさながらに昔の事とも覺えず。思ひいづるまゝに彼よ此よと空中の幻華を捉へて一句二句終に臥遊紀行とはなりぬ。其中に

足二本同行二人春の風
出女が戀持つ桃に花が咲く

水戸弘道館

烈公の冠正し梅の花

○古白一周忌　とはなりぬ。うたてや古白今頃は何處に迷ひ居るらん。あるは半ズボンの洋服身輕く獵銃を肩にして左の手には梅花の一枝に鴨一羽かけたるを携へ得々として死出の山路をや狩りあさるらん。あるは菅の小笠、菅の小蓑、脚絆、草鞋に人目を避けて六道の辻に地藏菩薩と問答をや試むらん。あるは極樂と地獄との國境に立ちて悟るが如く迷ふが如く笑ふが如く泣くが如く呆然と口を開けて空飛ぶ雲をやながむらん。あるは孜々として晝夜を分たず書きに書きたる數年の草稿、俳句和歌とも言はず小說戲曲とも言はず、ずた〳〵に切りさき喰ひ破りたるを盡く三途の川に押し流し手を拍つて啞然と笑ひ居るにやあらん。古白曾て吾を恨めり。今や白雲の中より吾を招くが如し。其追悼會にも得行かざりければ

春雨のわれまぼろしに近き身ぞ

（四月二十三日）

○春雨　は昨日もふりぬ。又今日もふりぬ。枕邊の俳書小說畫帖など彼を見、此をひろげなどするに果ては何にも飽きてそれもいや、これもいやなり。筆執りては筆をおき墨すりては墨を

投げ只々惘然として天井をながむることもうらさびしく春雨の句ども思ひつゞけゝる。

春の雨松三寸の小苗かな
春雨になるや廣野の南風

○旅行　ともし火は壁上の詩歌を照して雨戸くる音も絶えたるころ、家居まばらなる郷近所は静まりかへりて時々打ち笑ふ聲かすかに聞ゆ。何とは無く思ひに沈みたる眼を開けば柱に懸けし古蓑に思はず六年の昔ぞ偲ばれける。千葉より小湊に出でんと多喜のほとりに春雨に逢ひて宿とらんも面白からず、さりとて菅笠一蓋には凌ぎかねて路の邊の小店にて求めたる此蓑、肩にうちかけたる時始めて行脚のたましひを入れて

春雨のわれ蓑著たり笠著たり

水戸旅行には藤代に宿りしつぐの朝より降りそめて

はたごやの門を出づれば春の雨
歸り路は水戸を出んとする時大雨盆を傾くるが如し。
雨だら〳〵餘寒を降つて落しけり

昨年は金州の舍營に暴風雨に逢ひて飯たく烟に二日の間いぶされけるも今は話の種なり。

兀山や春雨まじり嵐吹く

○親鸞眞傳　といふ書世に出でぬ。善いかな此著、由來闇黑の中に投ぜられいたづらに企鎗を以て塗りあげられたる佛教諸派（殊に眞宗）の眞相を知らんと欲するや久し。只々其書なきに苦めり。今親鸞眞傳を得て通讀一過其考證の精確と著論の公平とを併せたる點に於て、吾人門外漢をして直ちに眞宗の起原と教理の大體とを知らしむる點に於て益を受くる事多し。其信者と他宗信者とは議論公平なる能はず、歴史家は宗教を度外に置き、西洋學者は佛書を讀まず、哲學者は佛教中の哲理をのみ研究する世の中に此種の書を著す其功亦多し。若し完備を求めなば教義及び眞宗特色の儀式習慣等を一層詳細に記し、親鸞の事蹟に就きては年表的の説明を附する等猶其外にも注文少からず。はた修辭の上にも多少の申分無きにあらず。

○種竹山人　非難の聲も詩人攻撃につれて起りぬ。山人が梅見の旅行に送別の詩多きは少と仰山に過ぐる嫌無きにあらず。されども山人と梅との關係を知らば何故に仰山なるかを知るを得べし。種竹もと梅花を愛すること太甚だしく從つて梅花の勝地とあれば直ちに之を訪ふ、必ずしも路程の遠近難易を問はず、梅花の詩とあれば直ちに之を抜抄す、必ずしも詞意の巧拙雅俗を論ぜず、啻に自ら好んで梅花の詩を作るのみならざるなり。其梅花を好む斯の如し。されば其自ら梅花を詠ずるの詩を見る、余未だ曾て其梅花の精神を得るに驚かずんばあらず。余は大膽にも左の斷定を下さん、曰く古來我邦と支那とを問はず）梅花を詠ずる者終に種竹の右に出づる者なしと。此點に於て青厓湖村も種竹に及ばざる遠し。況して槐南寧齋の如き人情人事に偏する者恐らくは良工苦心の處を知らざるべし。其梅花を愛する斯の如し。されば月瀬旅行は種竹に取りては一世一代の曠れなり。此曠れの首途に送別會を開き送別の詩を徴集すること山人自身にありて固より怪むに足らざるなり。世人此旅行を以て普通俗紳士の物見遊山と同一視するは則ち誤れり。論より證據、試みに聞け、此旅行より得來る數十首の五律が如何に金石の聲を成すかを。縱し芳野村觀梅の古體に及ばずとするも猶他人の企及し得べきものならざるは明けし。（世人或は謂ふ、種竹の本領は詠史に在りと。是れ昔日の種竹を知りて今日の種竹を知らざる者なり）

○文壇一佳話　種竹山人の祕して人に言はざる一佳話あり。山人は何處迄も之を祕する積りならん。されども山人と梅花との關係を知らし

めんが爲に余は山人の意に逆つてこゝに之れを表白せんとす。即ち山人の月瀬行は能因の古事に似たる所あり。否寧ろ支考の芳野行に似たる所あるなり。山人も亦曰く今度は能因をやらかすのだと。其梅花に熱心なること斯の如し。されば其詩も旅行三四日間の喘喘に出でたる者のみに非ずして數年の推敲に出でたるも多からむ。余は青厓の富士日光に行き遼東に行きたると種竹の芳野村に行き月瀬に行きたると同じく是れ詩壇の佳話なりと思ふなり。何事もこれ程の熱心無くては迚も名人に成り得べきにあらざるべし。されば種竹の月瀬行は名義上の旅行に止まりたるかと言ふに決して然らず。其月瀬より歸るや余に謂つて曰く、想像は何處迄も想像なり、終に實際に及ばず、月瀬に行きて余の利する處極めて多し、前年作る所の一半は之を改竄したり云々と。嗚呼、種竹は終に梅花狂のみ。

夢に美人來れり曰く梅の精と

（四月二十七日）

○春もはや　今日明日と押しつまりぬ。九十の春光を梅よ櫻よとうかれありきて今は其おこたりを悔む人もあらん。永き日の花見にも飽かでおもしろき夜を誰やらと酒酌みかはしたるは一は胡蝶の夢覺めて借錢に首のまはらぬ人もあらん。われはたゞ六疊の部屋にたれこめてくやむべき程の樂みをも得ぜず、惜むべき程の春を持たざりき。今日の苦みは昨日の樂みより來り明日の樂みは今日の苦みより起る世の中にさりとは昨日も今日も明日も何を苦みて此世にはながらへたる。あはれ又來ん春はありやなしや。

行く春を徐福がたよりなかりけり

紅あます日記も春のなごりかな

○宇宙　は吾に在り。方丈の中に八萬四千の大衆を容れて息の出來ぬ程に窮屈にもあらず。また八萬由旬の蓮臺も佛もはひるべき餘地あり。さりとて入れ物が大きくなりたるにはあらではひる物が小さくもなりたらんかし。一たび吾頭腦中に縮めたる宇宙を頭腦の外に投げ出せば宇宙は再び無量際に迄ひろがりぬ　さてや吾頭腦を取りて此宇宙に置けばこれはまた頭腦の小さゝよ。おもしろきものは相對なり、煩惱なり、つまらぬものは絶對なり、悟りなり。

出て見れば春の風吹く戸口かな

○小說　文學者として小說を讀めば世に小說程つまらぬ者はあらず。先づ冒頭より文章がたるみたり言葉が拙しとそれにのみ氣を取られ、やう〳〵二回三回と讀みさしてから卷中の人物となじみたる後は又此所行が此人に似あはしからず、此趣向がこゝの味ひを殺ぎ去りたりなどといさゝかなる疵さへ眼にさはりて、卷を掩ふて後、さてこれは面白かりきと思ふ程のもの少し。況して現世の人ことに額迄知りあひたる中などには嫉妬といふこともあるべし。吾れ從來小說が好きながら小說を讀むことは稀なり。大方ははじめの一行を讀み試みて唾を吐く、さらずば半枚許り讀みて其本を拋たざることなし。それは餘りに氣の強き人かなと側より笑はれ自らも笑ひ居たるを、人といふものは變てこなるものかな、ふさぎ勝に吐息つきあへぬ今日此頃何とはなしに小說を讀めば身のうさくさは忘れはてゝさてもこれ程面白きものはなし。卷中暗に吾とおぼしき人あり、吾の相手とおぼしき人あり。讀めば讀む程餘所事とは覺えず、獨りほゝ笑み獨り氣をもむをかしさよ。讀み終りて惡きくだり無理なる趣向なきにもあらず、されど面白き處のみ心にとまりて忘られず。小說はたしかに藥よりもきゝめ多し。あれこれと讀みもて行けばこゝに一物あり。

○たけくらべ　といふ。汚穢山の如き中より一もとの花を摘み來りて清香を南風に散ずれば人皆其香に醉ふて泥の如し。われは全篇の趣向をもほめず、事情に通ぜるにも感心せず、しかも一行を讀めば一行に驚き一回を讀めば一回に驚きぬ。文章に就きていはんか、西鶴を擬する者或は之れあらん、佶屈を以て儛兎を免るゝ者或は之れあらん、西鶴を學んで佶屈に失せず、平易なる言語を以て此緊密の文を爲すもの未だ其の比を見ず。其一部の趣向に就きていはんか、或は笑ひ或は怒り或は泣き或は默する處に於て終始嬌痴を離れざるは作者の技倆を見るに足る。其缺點は必ずしも言はず、枝葉廣がりて幹短きも其一なるべし。われ曾て閨秀小說の語を厭ふ、之を讀むを欲せず、人の之を評するを聞くをだに嫌へりしなり。一葉何者ぞ。吾は多數の作者におこそ頭巾を贈らまくほりす。

○白百合　第一卷は世に出でぬ。表紙の圖樣より既に特色（眞率にして深く思ひを構へざる處）を見はしたるゆかしき心地す。昔は英を崇め今は獨を尙ぶ世の中に佛國の文學美術とはいみじともおもしろし。只と其隆盛を祈るより外はあらず。されど此卷を見るに誠に無造作に過ぎてこれといふて目のとまる節無きは如何にや、これも乾燥派（南派）の特色にや。光づ櫻癡の琴責論は哲理の絲瓜のと少し仰山過ぎてお腹の中が見えるやうなり。「琴の形を竪に見れば、漲り落つる瀧の水、其水をくれる心の水責」などいふ法廷に不似合なる駄洒落を劇賞せらるゝやうではまだ文學者となるには問のある事なり。斯る論說を掲げんよりも繪畫を掲げられては如何。彩色は出來ずとも意匠ばかりにても美術界を益すること多からん。但し乾燥派は色の外に意匠無しとあらば致し方無し。

（五月四日）

○夏來れり　狹き庭を見れば葵は乳のあたり迄伸び出で青薄はや風を受けて亂れ初めたり。薔薇は赤き枝の若きが只すい〳〵と丈高く、赤き葉、赤き刺のうつくしき中に苔の紅を含みていくつも並びたるなか〳〵に開き盡したるよりは見處多し。上野の山は低き垣の上に見えて物古りたる杉木立の間に若葉少し漏れて日に照されたるもすが〳〵しく覺ゆ。

夏に入りてげん〳〵いまだ衰へず
古杉の　間に光る　若葉かな

○幟の節句　は東京にては新曆を用ふることとて舊曆の三月末に當り、しかも立夏に立てあひたるもをかし。儀式は大方にすたれたるを幟樹つることばかりはいよ〳〵はやり行くを見るに、子を可愛がる親の心は文明開化も同じことなるべし、それさへ定紋を染め鍾馗を畫きたる幟は吾等のかすかなる記憶に殘りて、今は最も俗なる鯉幟のみ風の空に飜へりぬ。此日ある場末を通りけるに家の庇に菖蒲葺きたる家あり。それをいと珍しと見つゝ、更に行けば極めて淋しき片側町の門邊に菖蒲と蓬とを束ねて掛けたるを見るに兎角に昔なつかしき心地せらる。

君が代や縮緬の鯉菖蒲の太刀
東京や菖蒲掛けたる家古し

○櫻癡居士が文學者として文學界の下級に在ることは專門家皆之を知れり。只と世の俗人は二十年前の名譽にかぶれて今猶第一流の文章家（縱し文學者とせぬ迄も）たりなどと稱するものあり。吾れ櫻癡の文學者にもあらず、亦所謂文章家にもあらざるは疾く之を知れりと雖も、其文學以外の日用の文章が文章を爲さぬ迄に下手なりとは今日迄知らざりき。試みに櫻癡の琴責哲理論の冒頭を見よ。

高尙雄偉なる想念は從來我國の脚本院本

に於て甚だ罕なりとは淺薄の論家が往々口にする所たり是はまだ我劇の著作を熟讀せざる輩が漫に放言するに過ぎざるの妄評なるのみ

あゝ是れ櫻癡先生の文か。吾れ不文を以て妄りに先輩を議する固より僭越を免れず。然れども先生が文章に拙なりといふ斷定はあながちに吾僻見に非ざるが如し。先生は二十年前の先生にして世の中は二十年後の世の中とは先生自身には御存じあるか如何。

○彌次馬的詩人　今日の文壇にて歌、俳、詩の三者を比較して其進歩の程度を比較せんに詩を第一とし俳を第二とし歌を第三とす。（其詩と言ひ俳と言ふ者皆舊派の老人連を含まず）吾の詩を見ること此の如し。故に詩人の行爲に於てあきたらざる者甚だ多し。殊に彌次馬的詩人なるものあり。名家先生の處をおとづれて菓子箱其他の品物を呈し叩頭拜伏して己が詩の批評添削を請ふ。其批評を乞ふ者は以て自ら省んとにはあらず、只〻圈點を成るべく澤山に頂戴して世人に誇らんとするなり。其添削を乞ふ者は以て修技の參考と爲さんとにはあらず、只〻先生の長所を假りて己の短所を補ひそれを自己の作の如く見せて世人を瞞著せんとするなり。目的既に世を欺くに在り。彼は批評と添削とを以て喜ぶ者に非ず。其批評せられたる詩を先生擔任の新聞紙上に載せられんことを請ふ。已に甲新聞に載せらる。乃ち乙新聞に行きて又其詩を載せんことを請ふ。已に乙新聞に載せらる。乃ち丙雜誌に行きて其詩を載せんことを請ふ。只〻是れ一首の惡詩、二新聞一雜誌に載せられて自ら以て無上の光榮となす。噫、此種の詩人の陋醜何ぞ夫れ此の如く甚だしきや。而して此間に起る多少の魂膽の如きは醜の又醜なる者、之を筆にするに堪へざるなり。（五月九日）

○草庵　におとづれたまふ人々庭前の即景として詠み出でし發句どもの中に

主人病ひあり　石竹いまだ開かず　牛伴

二三本あやめ咲いたる小庭かな　飄亭

一畝の覆盆子葉茂り實少し　虚子

雨晴れて茨に夕日の二三尺　鳴雪

など皆眞を寫さぬはあらず。此等の句を並べ見る時は一幅荒園の圖知らぬ人も眼に浮ぶべし。日蔭の小草も秀句を得て誇りかに生ひやまさらん。

○めざまし草　の裏に毎號疎畫をさしかへて入れること面白き趣向なり。長谷原といふ人大作の出來るか否か知られねど、小景を畫かせては不器用の中に雅致ありてなか〳〵に俗を離れたり。大村の銅像などいとをかし。最も醜きもの〻一つに數へたる銅像も此畫を得て少しは雅致を添へたる心地せり。併し此人畫師になるつもりにてはあるまじとある人語りぬ。

○鷗外漁史　一言を發すれば衆口一齊に之を攻撃す。是れあながちに其説の誤れるを駁すといふにはあらで、只〻鷗外は生意氣なりやツつけろやツつけろといふが如き觀無きにあらず。吾無學にして其説の可否を判するに苦しむと雖も、しかも其無學なる吾等にさへ筋も理窟もなき攻撃と思はるゝもの少からず。吾今迄は鷗外を左程えらい者とも知らざりしを、屁鋒文學者は己の無能をあらはさじとて却て鷗外の名を成したり。あら笑止。

○文學批評家　といふ者多くは一時の道樂又は餬口より起りし商賣なればあらかじめ世の需要に應ずる程のもとでを仕込みたるものにもあらざるべし。さればめざまし草にて譯語を論じ音樂を論じ西班牙語を論ずれば各批評家は爭ふて譯語を論じ音樂を論じ西班牙語を論じ以て之を駁す。其めざまし草を見しより之を駁する迄に

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

は圖書館に行きてインデッキスを探すやら、專門家に就いて片端を聞きかじるやら、仲太利人に西班牙語の發音を聞くやらいろ〳〵の魂膽もあることなるべし。之を思へば今の此評家はめざまし草のために學問させらるゝものなり。

○寧齋主人　吾を難じて一青厓湖村といふことの不倫なるは猶槐南寧齋といふの不倫なるに等しく云々と言へり。已に等しくといふ以上は二人宛の一團が好對なることを證せり。只〻槐南と寧齋とを竝ぶることに就きてこそ不平あるらめ。若し師弟の關係あるが爲に竝列すべからずとならば徂徠南郭抔をとも言はれぬ譯なり。若し力量異なるが爲に竝列すべからずとならば更に改めて青厓と槐南とを對し湖村と寧齋とを對せんか、湖村恐らくは之を恥ぢん、寧齋も亦之を恥ぢん。然らば更に改めて青厓と寧齋とを對し湖村と槐南とを對せんか、青厓恐らくは之を恥ぢん、湖村も亦之を恥ぢん。他の二君亦之を喜ばざるべし。然らば則ち奈何すべき。三人を二人づゝ組合せたる順列法は此三樣の外に出でざるを奈何せん。寧齋主人の言終に解すべからず。

○詩人の惡弊　と題して前に掲げたる者未だ盡きずと注意せられたる人あり。其言に曰く詩人にして高利貸を營む者あり。年始狀の末にさへ貸金の催促を爲すに至りては其貪慾も亦太甚し。是れ一。詩人にして本屋を營む者あり。他人の珍書を借り來り之をたまに使ひて客の足を引くに至りては其狡猾も亦太甚し。是れ二。詩人にして座席を爭ひ技術に誇り他人を誹り而して自ら學問も知らず一首の詩も完全には出來ぬ者あり。京都詩人なる者多くは是れなり。彼等老輩は取るに足らずとするも東京のにして猶此惡習に倣ふ者あり。陋も亦太甚し。名家是れ三。詩人にして自ら大家を以て居る者、後進の才ある者を妬んで之を抑へんとす。愚も亦太甚し。是れ四。詩人にして新聞雜誌の詩欄を擔當する者あり。それを文壇の覇權にても握りたる如く心得て人の詩を出してやるにも成るたけ勿體をつけ、縱し菓子箱持參せぬ迄も平身低頭して賴む者に非れば容易には出さぬぞとりきみたまふ。其から威張も亦太甚し。是れ五。

（五月十八日）

○牡丹　は艷麗第一の花なり。艷麗はなか〳〵に俗なりとて排斥せし昔の俳人はひたすら芭蕉の糟粕を嘗めて牡丹などは句にも作らざりけん。さるを天明の頃俳風一變して當時の人やゝ美しき者を詠み出でたるも曉臺闌更などなかなかに花に氣おされ牡丹の句に善きは稀なり。ひとり蕪村は牡丹の句二十首に及びてしかも首々其精神を得たり。此一事已に其手腕の大なるを見る。われ蕪村の句を見てそゞろ咏嘆の餘り終に西施の顰にならひて一いきに十句許り書い付けゝるを讀みくらべ見ればあな可笑しや。醜女は鏡見ぬものなりとてわざと蕪村の句は書かず、我句ばかり左に

廢苑に蜘の圍閉づる牡丹かな
牡丹伐つて其夜嵐の音すなり
宰相の詩會催す牡丹かな
薄月夜牡丹の露のこぼれけり
卓一瓶香消えなんとする牡丹かな
廊下より手燭さし出す牡丹かな
稟として牡丹動かず眞晝中
晝中の雲影移る牡丹かな
篝火の燃えやうつらん白牡丹
花震ふ大雨の中の牡丹かな

○風流宰相　牡丹侯は滄浪閣に老詩人を會して詩など作りたまひしとなん。爲是昇平頌事多となにがしの殿の歌ひ給ひしには似るやに似ずやわれは知らず。ひそかに當日の模樣を漏れ聞

くに招かれたる詩人十餘人、時を期して新橋に到れば、槐南先づ在り、諸氏を導いて汽車に乗らしむ。汽車大磯に著すれば錦山先づ在り、諸氏を導いて滄浪閣に行く。諸氏門を入れば主人侯袴を穿つて階を下つて迎ふ。午餐は握飯と折詰の御馳走に野趣を示し、夜に入れば銀燭光り輝きて老妓女將軍盃盤の間に周旋す。侯爵夫人亦次の間に在り、婢を督して奮相なからしめんことを力め、餘興として末松夫人の見臺を構へ義太夫を語るなど歓待、至らざるは無し。若し夫れ座間主客の應待に至りてはわれ等の最も聞かんと欲するもの、しかも聞くを得ざるは遺憾に堪へざるなり。然れども試みに臆測を下さんか、黄村の超然として詔はず、憤らざる、雪爪の昂然として物に關せざる、中洲の眞率にして嶄俳なる、青萍の饒舌にして失策多き、錦山の外剛にして内柔なる、槐南の戰々兢々として唯た其命に悖らんことを恐るゝ、某伯の賢にして愚なる、學海のことさらに丰角を露したる、黄石の阿諛に妙を得たる、一六の傍若無人に義太夫を語りたる、柳潭の一隅より座中を觀察するが如き、思ふに皆其特色を現はし來りしなるべし。殊に學海が席を進んで相公の前に到り突拍子にも朝鮮の事に就いて伺ひたいと大唱し滔々と議論したるなど一場の花を咲かせたりと聞ゆ。吁風流の人、風流の會、風流の地、しかも待遇の厚き禮數の寛なるわれ等をして實に垂涎萬丈ならしむ。賓客諸氏想ふに感涙に咽びたらんかし。只々惜むらくは相公徒に老詩人を招いて而して金莖玉露一杯の恩澤は其他に及ばざりしを。世の老儒者老歌人老書家老畫師老俳人老小說家にして此厚遇を受けなば彼等感泣して爭ふて相公の德を頌せんとす。相公願はくは一視同仁の意を以て彼等を見たまはんことを。

○法性寺入道　は政治家として如何の技量あるかわれ之を知らず、然れども關白太政大臣として威權の赫々たりしは今の春畝相公にもまさりてん。其名稱の長きことにて彼は百人一首に名を得たれども、此點に於ては彼終に春畝相公の内閣總理大臣何位大勳位侯爵といふ長さには及ばずてあたら恥を掻きけんいと氣の毒なり。只々彼は歌人にあらずして歌を詠み此は詩人にあらずして詩を詠ず。しかも兩者の詩歌を比較すれば自ら其人柄を見るに足るものあり。入道の歌は只ばつと廣くして大海を心の中に藏めたらんが如く、相公の詩は小さき人が裾野に立ちて富士を見上げたらんが如し。況して入道は伊周房杜などいふむづかしきことは知らざりしと見えて曾て言はず、相公はまた入道などいふ出世間の事を知りたまはずと覺しくいまだ其の沙汰を聞かず。いづれが物の役に立つべきか、時世異なれば同じ樣に論じ難かるべし。

（五月二十五日）

○明け易き夜頃　をひとり机に向ひてつく〳〵と身の行末、世の變遷を思ふにある時はあるにあられぬ心なやみに泡沫夢幻を觀じて消えなんとするともし火挑げあへず靜かに眼をふさぐ。ある時は月明晝の如く空を照らし見渡す限り奇草花を開き紛々たる異香鼻を撲ち來りて前途は無上の歡樂を以て滿されたるが如し。書を繙けば數卷立ちどころに讀み盡し筆を執れば一字の紙に上るなし。八聲の雞遠くに聞え森の鴉棟のほとりに鳴けば夏の夜忽ちに明けて眠らぬ夢は覺めたり。惘然。金殿玉樓の中にはまだ鮮のさかりなるべし。

短夜や空のなかばの天の川
短夜のにはかに明くるけしきかな
短夜や幽靈消えて雞の聲
短夜や焼場の灰のあたゝまり

○利口なやうで愚なのは伊藤侯なり。侯は維新の元勳として憲法の起草者として其力量を現はしたるは言ふまでもなく、總理大臣として長く其位置を保ち能く薩長諸元老の上に位するは其才識拔群の程思ひやられてなつかしきに、人間には拔日あるものかな、中にはこれが彼才相のしわざにやと驚かるゝことさへあり。近くは滄浪閣に詩人を招き侯自ら階を下つて迎ふるなど其雅量といひ謙德といひさすがは斯人なり心にくゝものせられたりと見るに、其の時衆客に示されたる侯の詩は體を失し且つから威張りに威張りたる如く感ぜらる。侯にして若し威張る意ありて作られしならばなかなかにめでたけれども、恐らくは侯は謙遜の意にて作りたるなるべきか、侯の詩律に精しからぬため斯く聞ゆるならんか。是れ利口なやうで愚な處なり。詩に精しからずと知らば利口な人は詩を作らざるべし。縱し作りても人に示さざるべし。縱し人に示すともそは十分に專門詩家の意見を聞きて後のことなるべし。侯の側に侍る詩家は詩人として立派なる技倆を有すれども侯を諫むるの膽力無く、遂に侯をして思はぬ恥を搔かしむるに至る。由來侯の幕下には才子多くして侃々諤々の士無し。是れ一大缺點なり。

○行屆いたやうで行屆かぬ　は大隈伯なり。

苟も伯を知る者誰か其行屆きたるに感ぜざらん。以て總理大臣と爲るべく以て大藏大臣と爲るべく以て內務大臣と爲るべく以て外務大臣と爲るべく其他農商務、遞信何れの省に大臣たるも能く其職を盡して戶位素餐の誚を受けざるべき者は大隈伯一人のみ。近くは伯の歸鄉途中各處に迎へられて演說するや學生に向ひては學問を說き實業家に向ひては實業を說き伊勢人に向ひては神苑の改良を說く。誰か其行き屆きたるに感ぜざらん。若し伊藤侯ならば何處に於ても誰に向ひても「日淸戰爭は諸君の力に依て大勝利を得ました…只今は戰勝後の經營に力を用ふるの時であります…　不肖博文は　陛下の親任を辱うし此大任に當り…」と活字で刷つたやうに演說せらるべきをさすがは大隈伯なり。斯くまで行屆きたる人が條約改正にはなぜに失敗したるか。之を思へば行き屆いたやうで行屆かぬは大隈伯なり。伯の野心は時として騎虎の勢ひ止むべからず、徒らに成功を急ぎて復行き屆きたると否とを顧るに遑あらざらしむる事さへあるなり。此際に在りて伯を見ば伯は血氣にはやりたる一壯士の如き感あり。且つ伯は膽略に於て伊侯に勝り才識に於て板伯に勝りたるに拘らず時々自由黨の苦しむる所となるは何ぞや。是亦伯の行き屆かざる所なり。伯の幕下には膽力、才略、經濟等に於て秀でたる者少からず、而して伯は一人の愚直なる者を養ふ能はず。余日蓮傳を讀みて感ず。

（六月十五日）

○客觀　世の人或は俳句（和歌等）に求むるに主觀的のものを以てす。主觀的のものに二種あり。一を感情的のもの一を知識的のものとす。前者は文學に屬すれども後者は文學に屬せず。普通の文學者（小說家等）は感情的のものを要求し文學者に非る者は知識的のものを要求す。甚だしきは感情的のものに非ざれば文學に非ずと爲すに至りては、所謂文學者も亦いまだ其美感に於て十分の發達を爲さざる者といふべし。感情的のもの惡きに非ず、主客兩觀相雜はる者亦佳ならざるに非ず、只これが爲に全く客觀的のものを文學以外として排除すべからず。人或は之をいやしめて寫眞師の寫眞と同一視す。然れども客觀の世界に於て文學的の場所を選擇し（一）それを文學的に文字に現したる（二）處に於て文學といふ固より不可を見ざるなり。客觀的の俳句數首を左に揭ぐ。

五月雨や垣根に白き草の花　叟柳
五月雨や眞菰の中に板の橋　其村
野の道の葛飾あたり蓮咲く　碧梧桐
青薄萩の若葉を壓すべく　虚子
若葉せり楠の根株にもり〳〵と　飄亭

○器の大小　世の人或は俳句を以て器小なりとす。實に十七八字の天地に俯仰する者なれば之を小説、長篇の韻文等に比して器の小なる論を俟たず。されど器の小なるを以て之を捨てよといふ人あるに至つては其意を得ざるなり。こゝに寶石を納るべきさゝやかなる函を持つ人あり。其人に向つて「汝何ぞ此の如き小き器を持つて滿足する。其小き函を捨てよ。其代りに大なる倉庫を建つべし、巨萬の財産は大なる倉庫に非ざれば納れ難し」と言はんに誰か其愚を笑はざらん。函は物を納るべき爲に作らるゝ者、其物小なれば函も隨つて小なるを便とす、其物大なれば函も隨つて大なるを便とす。而して其物に至りては大にして善き者あり、小にして善き者あり。兩者各特色あるを以て一を取り他を捨つべからざるは論なし。物已に大小あり。函豈大小なきを得んや。俳句の趣味は其簡單なる處に在り。簡單を捨てゝ複雜に就けよといふ者は終に其の簡單の趣味を解せざるのみ。落語家曰く大は小を兼ぬるといへども枸子は耳搔の代りを爲さずと。

○俳句と繪畫　世の人或は俳句を評つて曰く其幽玄といひ豪爽といふ、概ね十七字界中に就つての評言のみ、其説く所、他の詩文の包容する所に比して、何ぞ幽玄かあらむ、何ぞ豪爽かあらむと。是れ其人の斯く感ずるなるべし、〻山莊の新體詩を無上にありがたがる者には芭蕉蕪村の俳句を説くとも其妙を解せざるは當然のみ。ある人又俳句を論じて曰く之を繪畫に譬ふ。單に柳眉を畫きて（中略）以て一箇窈窕の美人を虚無髣髴の間に想見せしむるもの、これ成功したる十七字の姿態なるべしと。誠に此説の如き者あり。只〻其譬喩の適切ならざるのみ。俳句に詠ずる所の者を分つて二種となすべし、曰く小にして精なる者と大にして疎なる者と、小にして精なる者稍〻ある人の譬喩に近しし。されども此譬喩全くは當らず。更に之を小景近寫に譬ふ。大にして疎なる者は或人の言はざりし所、之を疎畫に譬ふ、疎畫は空間の廣きことを許す、局部の精細なることを許さざるなり。

（七月十日）

○戸外遊戯　といふもの古より我邦に存する者鬼事、隠れ子、いくさ事、遊泳等小兒のすなるものを除きては其種類極めて少し。其之れ有るは多く上等社會の歡娛に供する者にて蹴鞠、流鏑馬、笠懸、犬追物、打毬等なりとす。（鷹狩、弩射抔は全くの遊戯に非ず、今の射的の如し。今の大弓は稍〻戸外遊戯に近し）其外の戸外遊戯は皆西洋より來りしものにて中に就きて今最も盛んに行はるゝ蹟艇競漕とす。端艇競漕は河上、湖上又は海上數町の間を占むるを以て其空間の廣き點に於て外觀を壯ならしむべく又多數の人の觀覽に供するを得べし。只〻此遊戯は（他の戸外遊戯に比して）多額の費用を要すると競漕に適せる水面を要するを以て廣く一般に及ぶこと能はず、僅かに隅田川と横濱海上とに限りたるを近來琵琶湖上にても之を試むるに至れり。所謂陸上運動なるものは端艇競漕を除きて殆ど總ての戸外遊戯を含む者なり。而して普通に陸上運動會又は陸上競技會と稱する者は競走を主とし高飛、桿飛、幅飛、槌投、クリケット球、鐵丸投等の種類之に屬す。此れと全く種類を異にする陸上遊戯あり、之を競馬と爲す。遊戯は多く年少血氣の多人數を驅りて一場の競爭を試ましし

むるを常とするに獨り競馬は其仕掛の大なるに比して少人數の（比較的）老人を驅り、しかも其費用は端艇競漕等よりも遙に多きを要するを以てこは多く紳士富豪の專有物に歸せり。此技我邦人の嗜好に投ぜぬにや近來いよ〳〵振はざるが如し。今の競馬なる者は西洋より輸入し來りし者なれども加茂の競馬は古より行はれて史乘に見えたり。田舍にても祭禮の時かあらぬか土地の荷馬などを集めて競馬を催すことあり。是等はまことの戸外遊戯なるべし。

○ローンテニス　以上三種の外猶幾多の戸外遊戯あれども、最も普通なるをローンテニス及びベースボールとす。前者は殆ど十坪程の平地を要するばかりなれば洋人等多く庭園内に之を設け朝夕の運動に供す。此技、ゴム球をバット長さ四尺許りの杓子形の者にて打ち合ふ者なれば男女打ちまじりて爲すことも多し。人數は四人又は二人なれば我邦の蹴鞠などにも比すべきか。諸學校には此設あれど邦人の自邸内に之を設くる者多く之を聞かず。蓋し邦人戸外の遊戯を好まず、且つ婦女は運動する能はざればならん。

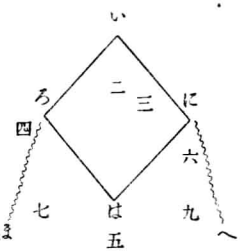
○ベースボール　に至りては之を行ふ者極めて少く之を知る人の區域も甚だ狹かりしが、近時第一高等學校と在横濱米人との間に仕合ありしより以來ベースボールといふ語は端なく世人の耳に入りたり。されどもベースボールの何たるやは殆ど之を知る人無かるべし。ベースボールは素と亞米利加合衆國の國技とも稱すべき者にして其遊技の國民一般に賞愛せらるゝは恰も我邦の相撲、西班牙の鬪牛抔にも類せりとか聞きぬ。（米人の吾に負けたるをくやしがりて幾度も仕合を挑むは殆ど國辱とも思へばなるべし）此技の我邦に傳はりし來歴は詳かに之を知らねども、或は云ふ元新橋鐵道局技師平岡凞と云ふ人か、米國より歸りて之を新橋鐵道局の職員間に傳へたるを始とするとかや。（明治十四五年の頃にもやあらん）それよりして元東京大學（豫備門）へ傳はりしと聞けど如何や。又同時に工部大學校、駒場農學校へも傳はりたりと覺ゆ。東京大學豫備門は後の第一高等中學校にして今の第一高等學校なり。明治十八九年來の記憶に據れば豫備門又は高等中學は時々工部大學、駒場農學と仕合ひたることあり。又新橋鐵道と工部と仕合ひたることもありしか。其後青山英和學校も仕合に出掛けたることありしかど年代は忘れたり。されば高等學校がベースボールに於ける經歴は今日に至る迄十四五年を費せりといへども（尤も生徒は常に交代しつゝあるなり）稍〻其完備せるは二十三四年以後なりとおぼし。これ迄は眞の遊び半分といふ有樣なりしが此時より稍〻眞面目の技術となり技術の上に進歩と藝術とを現せり。少くとも形式の上に於て藝術し初めたり。卽ち攫者が面と小手（擊劍に用ふる面と小手の如き者）を著けて直球を攫み投者が正投を學びて今迄九球なりし者を四球（或は六球なりしか）に改めたるが如き是れなり。次に其遊技法に就きて多少記明する所あるべし。

（七月十九日）

○ベースボールに要するもの　は凡そ千坪許りの平坦なる地面（芝生ならば猶善し）皮にて包みたる小球（直徑二寸許りにして中は護謨、絲の類にて充實したるもの）投者が投げたる球を打つべき木の棒（長さ四尺許りにして先の方稍〻太く手にて持つ處稍〻細きもの）一尺四方許りの荒布にて座蒲團の如く拵へたる基三個（本基及投者の位置に置くべき鐵板樣の物）一個宛、攫者の後方に張りて球を遮るべき網（高さ一間半幅二三間位）競技者十八人（九人宛敵味方に分るゝもの）審判者一人、幹事一人（勝負を

記すもの）等なり。

○ベースボール競技場　圖によりて説明すべし。



（い）本基（ホームベース）

（ろ）第一基（ベースを置く）

（は）第二基（基を置く）

（に）第三基（基を置く）

（一）攫者の位置（攫者の後方に網を張る）

（二）投者の位置

（三）短遮の位置（ショルトストップ）

（四）第一基人の位置（ベースマン）

（五）第二基人の位置（ベースマン）

（六）第三基人の位置（ベースマン）

（七）場右の位置（ライトフィルダー）

（八）場中の位置（センターフィルダー）

（九）場左の位置（レフトフィルダー）

直線いほ及びいへ（實際には線無し、或は白灰にて引く事あり）は無限に延長せられたるものとし直角ほいへの内は無限大の競技場たるべし。但し實際は本基にて打者の打ちたる球の達する處即ち限界となる。いろはには正方形にして十五間四方なり。勝負は小勝負九度を重ねて完結する者にして小勝負一度とは甲組（九人の味方）が防禦の地に立つ事と乙組（即ち甲組の敵）が防禦の地に立つ事との二度の半勝負に分るゝなり。防禦の地に立つ時は九人各〻其專務に從ひ一、二、三等の位置を取る。但し此位置は勝負中多少動搖することあり。甲組競技場に立つ時は乙組は球を打つ者等一二人（四人を越えず）の外は盡く後方に控へ居るなり。

○ベースボールの勝負　攻者（防禦者の敵）は一人つつ本基（い）より發して各基（ろ、は、に）を通過し再び本基に歸るを務とす、斯くして歸りたる者を廻了といふ。ベースボールの勝敗は九勝負終りたる後ち、各組廻了の數の總計を比較し多き方を勝とするなり。例へば「八に對する二十三の勝」といふは乙組の廻了の數八甲組廻了の數二十三にして甲組の勝なりといふ意なり。されば競技者の任務を言へば攻者の地に立つ時は成るべく廻了の數を多からしめんとし、防者の地に立つ時は成るべく敵の廻了の數を少からしめんとするに在り。廻了といふは正方形を一周することなれども其間には第一基第二基第三基等の關門あり、各關門には番人（第一基は第一基人之を守る第二第三皆然り）あるを以て容易に通過すること能はざるなり。走者（通過しつゝある者）或る事情のもとに通過の權利を失ふを除外といふ。（普通に殺されるといふ）審判官除外と呼べば走者（又は打者）は直ちに線外に出でて後方の控所に入らざるべからず。除外三人に及べば其の半勝負は終るなり。故に攻者は除外三人に及ばざる内に多く廻了せんとし、防者は廻了者を生ぜざる内に三人の除外者を生ぜしめんとす。除外三人に及べば防者代りて攻者となり攻者代りて防者となる。此の如くして再び除外三人を生ずれば即ち第一小勝負終る。彼れ攻め此れ防ぎ各〻防ぐ事九度、攻むる事九度に及びて全勝負終る。

○ベースボールの球　ベースボールには只一個の球あるのみ。而して球は常に防者の手にあり。此球こそ此遊戯の中心となる者にして球の行く處即ち遊戯の中心なり。球は常に動く故

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com